

2007年度海外研修生等助成事業 研修報告

聴覚に障害をもつ生徒への英語指導

～英語を母国語としない国における～

静岡県立浜松聾学校 教諭 杉山 修一

日本と同様に英語を母国語としない国において、外国語としての初期英語教育の指導内容や達成目標を知りたい。また、スイスにおける外国語としての英語の位置を探り、聴覚に障害をもった子どもたちへの取り組みがどのような手段・方法で行われているのか、マルチリンガルと呼ばれ、福祉先進国でもあるスイスで学びたいと考えた（以下は241名へのアンケートとインタビューによる）。

聴覚障害者協会の方々と聾者の柔道欧州チャンピオンJonas Jenzer（ヨーナス イエンツウア）へアンケートとインタビューを試みた。彼らの言語は国語である独語と、母語といえる手話（スイスジェーマン手話）である。協会幹部とヨーナスとは手話、身振り交じりの英語でコミュニケーションを図ることができた。その他の方々とは、英語から独手話への通訳を入れながら、日本の手話や身振りも活用してこちらの意図を伝えてみた。日本の手話と類似することばも見られた。彼らの使用するスイス手話には独語タイプ、仏語タイプ、伊



聾学校での言語指導の様子

語タイプがあり、統計によればそれぞれの手話の使用人口は、独6,000人、仏1,000人、伊200人と信じられないほど少ない。これは聴覚障害者がその地域内でコミュニティを作り、手話を共通の母語として生活しているからではないかと推察できる。

聾学校では教師は独語の口話で授業を行い、必要に応じて独手話を使用していた。英語教育は国語である独語の習得後という考えがあり、意外にも英語教育は必要に応じて行い必修科目ではなかった。ただ、いつでも語学を学べる環境がスイスにはあり、学校教育の中で習得させるという狭い考えではないことが伺えた。一般の中高では、第三言語として英語が学習されているため、アンケートを実施した96%にあたる48名が独・仏・英の三ヶ国語を使用可能言語としてあげている。

目的意識と環境の提供が英語習得の重要な要素になることを改めて感じた。学習を行う具体的目的を示しながら、興味を持って英語に取り組める環境を生徒たちに提供していきたいと考える。



中学での英語授業の様子